

超高齢社会における手外科疾患の治療

わが国は世界に先駆けて2007年に65歳以上の人口が21%を超えて、超高齢社会を迎えている。2024年9月現在の65歳以上の人口は3,625万人であり、高齢化率は29.3%で過去最高を更新している。高齢化に伴い主な手外科疾患も変遷しており、外傷以外にも高齢に伴う手の変性疾患に対して治療する機会が増加している。これらの手の変性疾患に対する治療法は進化しており、手根管症候群や狭窄性腱鞘炎、そしてDupuytren拘縮などに対する手術の適応が明確になってきている。手の変形性関節症に対する人工関節を含む手術治療も増加している。

今回の企画においては、まず総論として岡谷市民病院の内山先生に、増加している高齢者の手外科疾患について概説していただいた。各論としては手根管症候群の病態と治療について産業医科大学の山中先生、狭窄性腱鞘炎の治療を名古屋徳洲会総合病院の水島先生、Dupuytren拘縮の病態と治療を北海道大学の木田先生、Heberden結節の治療を市立伊勢総合病院の里中先生、Bouchard結節に対するシリコンインプラント置換術を笠岡第一病院の橋詰先生、表面置換型人工指関節置換術を関西医科大学の浜田先生、母指CM関節症に対する関節固定術を信州大学の林先生、関節形成術をキナシ大林病院の加地先生、第1中手骨骨切り術を溝口外科整形外科病院の小川先生にご執筆いただいた。手根管症候群と狭窄性腱鞘炎、そしてDupuytren拘縮はいずれもdiabetic handと呼ばれる糖尿病に多く発症する手の疾患でもあり、糖尿病がなくても年齢とともに罹患率が増加する。手の変形性関節症についても本邦および欧米の疫学調査から年齢とともに直線的に罹患率が増加することが報告されており、まさに超高齢社会で増加している疾患である。

今回収載されている論文は筆者の豊富な経験とエビデンスに基づいた内容が記載されており、日常診療に役立つものばかりである。今後の課題としては、各病態の発症メカニズムに基づいた治療指針が必要と考えている。手の変形性関節症などは欧米のガイドラインを参考にして診療しているが、超高齢社会のトップを走る本邦発の治療指針が求められる。現状においては同じ疾患であっても施設により治療方針が大きく異なる場合が少なくない。どの治療が最も有効であるか、まずは多施設前向き研究によりエビデンスの収集から始める必要がある。

(山本美知郎)